

アイルランド略史についての一考察

波多野 裕造

- 一 はじめに
- 二 アイルランドの地勢と気候
- 三 略史

一 はじめに

アイルランドは有史以来五千年を経てきた古い国であり、わが国でも明治以来、その存在はよく知られていたにも拘らず、実態は一般には必ずしも十分理解されているとはいえない。それは何故であろうか。

一つには、この国が古くから存在していながら、今世紀の初めまでは独立国でなく、英国の一部としてしか認識されていなかったことによるのであろう。しかし、そんなことをいえば、北欧のフィンランドがロシアから独立したの

は一九一七年、ロシア革命の激動のさなかであったし、ノルウェーだってスウェーデンとの同君連合を解消して独立したのは一九〇五年と、いずれも今世紀に入ってからである。アイルランドがイギリスから分離、独立したのは一九二二年であるから、独立の時期はフィンランドとそれほど違わない。

それにもかかわらず、未だに独立国としてのアイルランドの存在感が日本人の意識のなかで希薄なのは、アイルランド人には明治の初期に「お雇い外国人」として来日し、わが国の近代化に貢献した人が結構多く、その頃の彼らは英国人として受け入れられていたために、アイルランド人としてのアイデンティティを意識されないまま、今日に至ったためだということではないだろうか。つまり、逆説的ではあるが、アイルランドの場合は北欧諸国と違い、古くからわが国と接触があり、馴染んできたがためにかえって正當な理解が妨げられてきた、という側面があるように思われる。アイルランド人はかつては立派なゲールリク（アイルランド語）という自分の言葉を持っていたのに、永年にわたる英国の植民地支配を受けるうちにそれを失い、基本的に英語国になってしまっている、という事情もこれに加わるのかも知れない。

ともあれ、今日のわが国において、アイルランドが正當な認識と評価を得ていないということは事実である。筆者は最近まで過去三年間、駐アイルランド大使として同国の首都、ダブリンに在勤した。赴任に先立って多少なりとも任地の事情を知っておきたいと思い、図書館に行ってアイルランド関係の本や資料を探したのだが、古い民話や妖精の話、英国の支配からの解放をめざした苦難の独立闘争史などはいくつか見つかったものの、筆者が求めていたような、現代のアイルランドを理解する上で役立ちそうな包括的な書物は、筆者が見た限りでは、ほとんどなかったといえてよい。

わが国ではアイルランドは古くから愛蘭土と書かれ、「庭の千草」や「ダニー・ボーイ」、「アイルランドの子守歌」などで親しまれてきたが、その割にはこの国の実態は一般に知られていない。一例を挙げれば、筆者がダブリンに在勤中、友人から戴いた手紙の封筒の宛名にDublin, U.K.と書かれていたのがあった。このことはアイルランドを未だに英国の一部だと錯覚している人がいるということを物語っている。断って置くが、この手紙を書いた人は日本の大学を卒業した、いわゆる高学歴者である。

いうまでもなく、ヨーロッパは今、政治的・経済的・社会的に欧州連合（EU）という新しい統合体をめざして動いており、アイルランドはその中核を形成している欧州共同体（EC）加盟十二カ国の一つである。マーストリヒト条約成立以来、ECは拡大と深化という二つの方向に向かって試行錯誤を繰り返しながら進んでいるが、今後さらにヨーロッパが一つの統合体としての性格を強めていくとしても、デンマークが国民投票で一度はマーストリヒト条約を拒否し、それ以後、補完性（subsidiarity）の問題が強調されるようになったことから明らかなように、各加盟国の意向は決して軽視できないと筆者は考えている。

ところが、残念なことにわが国のアイルランド研究の実状は極めて不十分といわざるを得ない。これはわが国ではアイルランドに対する関心が、もっぱら文学とかケルト文化といった面に偏り、勿論こうした研究も民族の心とか特質を知る上できわめて大切ではあるが、「アイルランド史はイギリス史の傍流」といった捉え方が一般的で、社会科学の対象としては若干の例外を除き、これまでほとんど学界の注目するところとならなかった所為であろう。筆者があえてここにアイルランド略史を紹介する所以である。この小論が少しでもアイルランドに対する一般の関心と呼び起こすのに役立つならば、筆者にとって望外の喜びである。

二 アイルランドの地勢と気候

アイルランドはヨーロッパ大陸の北西、北緯五一・五度乃至五五・五度、西経五・五度乃至一〇・五度に位置する島国で、東はアイルランド海を隔てて英国と接しているほかは、大西洋に面している。総面積は八万四千四百二十一平方キロメートルだから北海道（七万八千五百九平方キロ）よりやや大きいが、英国の一部となっている北アイルランド六県を除くと七万二千八百二十二平方キロである。南北の長さは四百八十六キロ、東西は二百七十五キロで、周囲の海岸線は五千六百三十一キロに達する。

島の中央部は石灰岩のなだらかな低地に至る所に牧草地があり、周囲の海岸は岩山となっており、西と北西部、さらに東部海岸の山は花崗岩でできている。これにひきかえ、北東の高原地帯は玄武岩に蔽われている。スコットランドと同様、湿地や湖水が各地にみられる。

アイルランドは高緯度の割りには一年中を通じてあまり寒暖の差が大きくなく、冬でも芝が青々しているので「エメラルドの島」と呼ばれている。これは大西洋を渡ってきてこの島の海岸を洗っているメキシコ湾流の影響で、暖かい南西風のため、真冬でも摂氏零度以下に下がることは殆どなく、北部でもあまり降雪は頻繁ではない。ただし、高緯度のため、冬と夏の日照時間は大きく異なる。とくに三月下旬から十月下旬まで夏時間が実施され、最も日の長い頃は午後十一時近くまで明るい。冬の一、二月の気温は摂氏四度乃至七度、また夏にはときに二十五度に達することもあるが、これはむしろめずらしく、普通七、八月の平均温度は十四度乃至十六度であり、暑くて寝苦しいというようなことはまずない。

一年を通じて雨はよく降り、とくに大西洋からの暖かい、湿った空気の流れを受けて西のほうで、東部に比べて降雨量が多い。平均降雨量は夏季六〇ミリ、冬季一〇〇ミリ前後である。このようにアイルランドは雨が多いことで知られているが、それでも夏の間は随分と日照時間が長く、五月から八月にかけての平均的日照時間は六時間、一番雨の少ない南東部では五〜六月の平均は七時間半となっている。

周囲を海に囲まれているため、湿度は一年を通じてかなり高く、夏季でも八〇％から八四％、冬季は八四％乃至八七％である。また冬季にはしばしば強風が吹くことがあり、西寄りの風が吹くときは比較的温暖だが、シベリアからの東風は時に厳しい寒気をもたらすことがある。天気は一般に不安定で変わりやすく、朝晴れている日でも急に天気が崩れることがままあるので、出掛けるときは雨具の用意を怠ってはならない。

アイルランドはこのように比較的雨の多い、穏やかな気候に恵まれていることや、幸か不幸か環境を汚染するような重化学工業の発達を経験しなかったことから、美しい自然が破壊されずに残っており、動植物も豊富である。一万年ほど前の旧石器時代まではアイルランドは大陸と陸続きだったため、動植物はヨーロッパ大陸に棲息するものとはほぼ同じだが、種類は若干少ない。太古この島を蔽っていた原生林はもはや見られないが、圧倒的に多い樺に混じって柞、樺、トネリコ、イチイ等が生えた林が各地に散在している。また地面はさまざまな種類の苔や羊歯類に蔽われている。しかし、樹木の乱伐が行なわれた時期があって、アイルランドの森林面積は随分減ったといわれており、最近ではエゾマツ、カラマツ、樅等の植林が盛んに行なわれるようになった。沼沢地が多いことから、英国同様ヒース、スゲのような灌木が各地で見られる。前述のように、高緯度の割には温暖な気候なので、地中海沿岸植物の北限となっているのは興味深い。

このように自然が比較的良好な状態で保存されているところから野性の動物や鳥も種類が多く、キジ、マガモのような野鳥や、森林に棲むキツネ、タヌキ、ウサギなどを銃を持って追い掛ける狩猟はこの国の最も盛んなスポーツの一つとなっている。もっとも政府の森林・野性生物局が自然環境や野性生物を保護する責任を負っており、狩猟が許されるのは一定の期間内だけで、狩猟対象も一定の鳥や動物のみに限定されている。また狩猟しようとする者は当局より事前に狩猟許可証を取得する必要があるが、その入手はさほど面倒ではない。野鳥の種類は約三百八十種で、このうちにはグリーンランドから飛来して冬の間をアイルランドで過ごす白首ガチョウのような渡り鳥も多いが、この国に定住している鳥も百三十五種類に及んでいる。全国的によく見られるのはハクチョウ、ガチョウ、カモ、サシ、カモメのような水鳥でウェックスフォード県にある野鳥保護区は有名だが、アイルランド政府は国際的な野鳥保護条約に積極的に加入し、国内に多くの保護区を設けるなどして、野鳥の保護・観察に当たっている。自然保護地域は全国で約二十ヶ所ばかりあって、国有林や国立公園も全国に大規模なものが十二、小さなものまで入れると四百に上っている。

沿岸や近海にはもちろん、多数の湖水や河川には水産資源が豊富である。鮭、鱒、イワナ、鱒、ヒラメ、カレイ、カマス、タイ、鮪、スズキ、鯿などが魚屋の店頭に並んでいるが、アイルランド人はあまり魚を好まない人が多い。アイルランドには昔、聖パトリックがヘビを島から駆逐したという伝説があって、今でもそう信じられているが、事実両棲類の蛙は大小いろいろな種類がいるのに、爬虫類としてはトカゲがいるだけで、ヘビは見当らない。

三 略 史

アイルランドは石器時代から人類が住んでいたとみられており、五千年ぐらい前からヨーロッパ大陸を西へ、西へと移動してきたケルト、ヴァイキング、ノルマン、アングロ・サクソンなどの各部族がつぎつぎに海を渡ってこの島に住みつくようになった。

初期の移住者たちはブリテン島から狭い海峡を渡ってアイルランドの北部に入ってきた狩猟民族が主流であった。ついで新石器時代になると牛や羊を飼育し、土地を耕して農業を営む農耕民族が流入するようになる。これらの人々の遺跡と思われる民家、壺、日常生活に使われた道具などが各地の沼沢地周辺に残っており、とくに最近リマリック県で発掘された古代遺跡は有名である。彼らはほぼ自給自足の生活をしていたと思われるが、石斧など一部の道具は他の集団と交易していた形跡がある。彼らの原始宗教はドルイド教と呼ばれる多神教だったが、今日ミース県のニューグレンジ等で見られる巨石は彼らの墓を表すモニュメントである。

紀元前二〇〇〇年ぐらいから青銅器時代に入ると、鉱石を求めて新しい移住者がアイルランドを訪れるようになる。彼らは鉱石から青銅や金を精練し、さまざまな金属で細工物をこしらえた。彼らがつくった多くの青銅製の斧や武器、壺や食器類、さらには装身具等が残っている。彼らは外敵から身を守るために、湖のなかに周囲を柵で囲った人工島をつくり、そのうえに建てた住居に住んでいた。

この島に渡ってきた多くの移住者のなかでもっとも有力な集団となったのは紀元前六世紀頃に中部ヨーロッパから侵入を開始したケルト族であった。この侵入は波状的に何回かに分かれて西暦が始まる頃まで続く。やがて彼らは先

住の各部族を支配するようになり、考古学上ラテーヌ文化と呼ばれている独特のケルト文化を築くが、その原型はスイスのヌーシャテル湖東端にヨーロッパ鉄器時代後期の遺跡として残っている。

当時のアイルランドは大小百五十ばかりの小王国に分かれて、それぞれ合従連衡を繰り返す諸侯によって統治されていたが、そのうちでも強大な五人の王が支配した領域はトゥアと呼ばれた。邪悪なフォモーレー一族を平定し、アイルランドの黄金時代を築いたというトゥア・デ・ダーナンの伝説が生まれたのは、このような背景のなかからである。やがてアイルランドはケルト文化とケルト語によって次第に統一されていった。ケルトが支配するアイルランドは単純な農耕経済で、まだ貨幣は流通しておらず、交易の手段には貨幣の代わりに牛を使っていた。まだ都市が発達するところまではいっておらず、人々は家族単位で集団を形成して、農耕を営んでいたが、族長の下に非常に厳しい身分制度が確立されており、世襲のブレホンと称された裁判官が定めた神聖不可侵の掟によって、すべてが律せられる部族共同社会であった。

キリスト教がこの島に入ったのは五世紀ごろと思われるが、ゴール地方がローマ帝国の版図に編入される前は土着の宗教が人々の日常を支配していたように、アイルランドではドルイド教と呼ばれる原始的な民俗信仰が一般的であった。この宗教は一種のアニミズムで、自然物にはすべて靈魂が内在すると信じられており、妖精や精霊、悪魔などが実在するとする信仰である。アイルランドにキリスト教をもたらしたのは聖パトリックであり、現在でも聖パトリックはこの国の守護聖人と崇められているが、それにもかかわらず、アイルランドのカトリック教はヨーロッパ大陸のそれと比べて、一味違うのはこの原始信仰であったドルイド教の影響が濃厚に残っているためと思われる。それはカトリック教の総本山であるローマから地理的に遠く離れていることもあって、最初の布教者たちがあ

まから現地の土着信仰を排除することなく、布教の便宜のために、むしろこれとの共存をはかったからではないかとも考えられる。

聖パトリックは「アイルランドの使徒」と呼ばれているように、この国にとっては、もっとも大切な守護聖人で、この聖人を偲ぶ日とされている三月十七日は毎年「セント・パトリックス・デー」という国民的祝日となっており、全世界のアイルランド人が各地で緑一色のいでたちで一大パレードを行なって祝福し合う。ついでにこの聖人について一言すれば、彼は西暦三八六ごろにブリタニアに生まれ、四〇一年に同地に侵入したアイルランド人により連れ去られ、アイルランドで奴隸として働かされた。のち、故郷に帰って聖職に就いたが、自分が苦難の青少年時代を過ごしたアイルランドに布教のため四三二年に再び戻ってきて、まず北部から布教活動を始め、次第に全土に及ぼした。各地を行脚して多くの修道院や教会を建て、弟子を育成してついにアイルランド全土のキリスト教化に成功したが、その過程で各地に多くの、いわゆる聖パトリック伝説を残した。しかし実際の史実となると不明な点が多く、死亡した年も四六一年説と、四九二年説があるが、後者だとすると百年以上も生きたことになる。

ともあれ、北部六県を除くアイルランドでは総人口（約三百五十万人）の九三％がローマ・カトリック教徒で、新教徒は三・四％に過ぎず、残りはユダヤ教徒、回教徒などが少数いるだけである。あとでも触れるが、北アイルランド問題の解決がむずかしいのは、実はアイルランド共和国においてカトリック教が国教ともいふべき地位を占めていることと無関係ではない。周知のように、北アイルランド人口の三分の二はプロテスタントであり、彼らは共和国が建前は政教分離でも、現実にはあまりにもカトリック教会の力が強過ぎて、もし一緒になれば彼らが少数派に転落して、現在の社会的優位性を失ってしまうことを恐れている。

現在アイルランド共和国の人口は三百五十数万人、北アイルランドを含めても五百万人強に過ぎないが、一九九〇年十一月に第七代大統領に就任したメアリー・ロビンソン女史が就任式の演説で「世界にはアイルランド人（の子孫）と自称する人々が七千万人以上もあり、自分はその人たちすべてを代表する者である」と誇らしげに述べたように、アイルランド人には移住先で活躍している人が多い。

ここでアイルランド人の祖先といわれているケルト人について述べてみたい。前述のとおり、アイルランドには先住民がいたようであるが、その実態はあまりよく分かっていない。ケルト人がアイルランドに来て住みついたのは紀元前六世紀ごろであろうと推定されている。中部ヨーロッパから西へ移動してきたケルト人は、まず大ブリテン島へ渡り、ウェールズ（カンブリア）、スコットランド（カレドニア）に定住するが、そのうちの一部がさらにアイルランド海を越えてこのヨーロッパの最西端の島に移ってきた。すなわち、ケルトの文化とか神話がイギリス文学などに及ぼした影響がいわゆるようになったのは最近のことだが、実際にはブリテンやアイルランドにはノルマン人やサクソン人が来るはるか以前からケルト人が住んでいたということである。ケルト人のことが比較的最近まで、あまり知られていなかったのは彼らが豊かな独特の文化を持ちながらも、それを文字の形で記録することを知らず、自らの言葉で歴史を残さなかったからであろう。われわれがケルトのことを知ったのは、ケルト人自身の記録によってではなく、ギリシャ人やローマ人など他民族の文書を通じて間接的にであった。

ケルト人は現在のドイツを中心に中部ヨーロッパ一帯に住んでいたが、次第に西はフランス、イベリア半島、東はハンガリー、トルコ、ロシア、南はイタリア、ギリシャといったように、ユーラシア大陸の各地に流れていった。当時、ケルト人はギリシャ人などからは「戦いが好きで、勇敢だが粗野な野蛮人」とみられていた。このようなケルト

人の特徴は、今も英国人などにはアイルランド人の性格として色濃く残っていると信じられている。

こうした剽悍な性格からローマ帝国時代になってもその統治に従おうとしなかったため、カエサルはケルトについて「衝動的で、感情的で、気紛れで、だまされやすく、落ち着きのない連中」と書いている。ケルト人たちは、文字による記録は残さなかったが、紀元前五世紀ぐらいからドイツなど中欧各地に多くの美しい装身具や武器類を残しており、彼らが野蛮人どころか、独特の高い文化を有していたことを示している。彼らは戦いを好んだが、半面美しいものを愛し、また詩や音楽にもすぐれた才能を持っていたことが明らかとなっている。

ギリシャ人によれば、ケルト人の特徴は背が高く、白い肌と青い目を持っていた。髪の毛はやわらかく波打つプロンドが多く、なかには赤毛の者もいたとされているが、この人種の特徴は現在のアイルランド人のなかに残っている。ケルト人は丘のうえに築いた砦のなかで暮らしていたが、その遺跡はスペイン、フランス、ドイツ、イギリス等各地に散在している。彼らは砦の外で牛、羊、豚などの家畜を飼い、野性の鹿や猪を狩ったり、川や湖で魚を獲って食糧にした。海辺に住んでいたケルト人は貝や海藻類も食べていたようである。彼らはギリシャ人と交易して手に入れた葡萄酒を好んだが、蜂蜜から酒を造ることも知っていた。

ケルトの土着の宗教は多神教であった。ギリシャの神々と同じく、人間に近く、ときには人間と恋をするようなところがあったが、モリガンと呼ばれた女神は恐ろしい戦争の神様で戦士たちを戦いに駆り立てたといわれる。またケルトの神は動物や鳥、その他何にでも変身することができた。樹木や草花にも化けるので、人々は自然界の万物を神の化身として崇めたのであった。ドルイド教はこうした民衆の信仰に根ざした宗教で、自然物にはすべて靈魂が内在すると信じられていた。精霊や妖精に対するアイルランド人の異常とも思える関心には、このような歴史的、民族的

背景がある。

彼らは伝説を信じ、多くの祭りを行なったが、毎年十一月一日は「サワン」といって、夏の終わりを告げる祭りであった。その前夜は死者の魂や悪霊が地上に戻ってくると信じられており、人々はこれらの精霊を慰めるために菓子や果物を戸外に置くという習慣が古くからあった。（冥界から戻ってくる死者たちの靈魂を迎えるというこの風習は、わが国のお盆の行事と相通じるものがあり、興味深い。）のちにアイルランドがキリスト教に改宗してからも、この習慣は残り、サワンはオールハロウズ（万聖節）、その前夜はハロウズ・イーヴ、つまりハロウィーンと呼ばれるようになった。現在アイルランドのみならず、イギリス、アメリカなどでも子供のお祭りとして盛んであるが、その源流はケルトの民俗信仰に端を発していたのである。また今日でも西洋人の中には烏を忌み嫌う人が多いが、これもケルト信仰で烏が死神の使者、ないしは死の象徴とされていたからである。

ともあれ、ケルト人は文字を持たなかったため、すべては口述による伝承であった。とくに戦いの記録やその英雄の行動は多くの語り部や吟遊詩人によって語り継がれた。ケルトの各部族は数世紀にわたり、当時の最強世界国家ローマを相手に新しい領地を求めて戦いを繰り返していたが、紀元前六〇年にカエサルがローマ軍の司令官となるに至り、この天才的な軍人政治家が指揮したガリア戦争で壊滅的打撃を受ける。

カエサルはフランス南部からヘルヴェティと呼ばれていたケルト部族を追い払い、北上してベルギーに達するや、ローマ軍を二手に分けてフランス北部と西部に兵を進め、謀略と武力を巧みに使い分けてこの地方に住んでいたケルト人を征服した。このケルト人との戦いの記録が有名なカエサルの「ガリア戦記」である。カエサルに敗れたケルト族はフランスの地を去り、一部は東ヨーロッパへ、大部分の者は海を渡って大ブリテン島とアイルランドへ逃れた。

カエサルのがリア征服の九十年後の西暦四三年に、ローマ軍はブリテン島（ブリタニア）への侵入を開始する。そして四十年にわたった激しい戦いの後、ほぼイングランドの全域を占領し、そこに住んでいたケルト人を虐殺したが、スコットランドとの境界に、東西に長い石の壁を構築し、その南部のみを支配した。しかし、どういうわけか、ヒベリニアと彼らが呼んだ海を隔てたアイルランドにはついに一度も足を踏み入れなかった。このためアイルランドのケルト人のみがローマの支配を受けることを免れた。その後、いろいろな民族がアイルランドへやってくるが、アイルランド人の体に流れているのはケルトの血がもともと濃いと考えられている。また現にアイルランド、スコットランド、ウェールズ、フランスのブルターニュ地方の一部などでは英語やフランス語のほかに現在でもケルト語の一種（ゲールック）が話されているところがある。とくにアイルランドでは意識的にケルト語の保存政策がとられているが、これはアイルランド人がケルト人の後裔であることに誇りを持っているからであろう。

古代アイルランドは百五十ばかりのトゥアと呼ばれた集落で構成され、その部族集団の族長はトゥアシークと呼ばれていたが、今日のアイルランド共和国の首相が「ティー・ショック」（*Taoiseach*）と呼ばれているのは、その名残りである。

アイルランドにキリスト教を伝えたのは前述のとおり、聖パトリックであると考えられているが、実際にはそれ以前にもごく少数のキリスト教徒が存在したようである。しかしアイルランド全土にキリスト教が普及したのは、やはり西暦五世紀の末頃と考えてよいであろう。そしてこの頃からアイルランドに文字で書かれた記録が残されている。アイルランドにおける初期キリスト教史に大きな役割を果たしたのは全国各地に造られた修道院制度であった。聖ケヴィンによって建てられたダブリン郊外のグレンダロックにある僧院などはその面影を今日に伝えている。

こうした僧院において修道士たちが厳しく律せられた生活のなかで書き残した文書は今も残っていて、当時の生活を偲ばせてくれる。羊皮紙にラテン語で書かれた四大福音書の写本として有名な『ケルズの書』もその一つで、現在ダブリン市内のトリニティ・カレッジの図書館に所蔵されている。『ケルズの書』は聖コルムキル（聖コルンバのアイランド語名）の手で書かれたと信じられているが、実際は何人かによって書き継がれたものと思われる。僧院に学んだ修道士の多くは部族の長や有力者の子弟で、彼らは古代ローマが滅んだあと、欧州大陸が北方から南下してきたゲルマン人らの「蛮族」たちによって荒らされるのを見て、大陸にキリスト教を復活させることは自分たちの義務という使命感にとりつかれ、続々と異教の地と化した大陸に渡り、ときには命を懸けて布教に専念する。当時のアイランドは欧州においてキリスト教文明の松明を守る孤塁の感があった。

かくて六世紀以降、極西の辺境の地アイランドは、これら伝道の使命感に燃える修道士たちの活躍によってブリテンのみならず、欧州大陸にも大きな影響を与える存在となった。彼らの活動の拠点となったのは、フランスのペロニヌにあるサン・フルセ、ドイツのヴェルツブルクにある聖キリアン、ザルツブルクのウェルギリウス、イタリアのポッピオにあるコルンバヌス等の各僧院である。アイランドから来た修道士たちは未開の異教徒たちをキリスト教文明で教化し、やがて九世紀になってフランスのカロリング朝で花開いた文芸復興の端緒を造ったのであった。

アイランド出身の修道士たちが、大陸で活躍していた頃、本国でも当時のアイランドは高い文化を生み出していた。ケルト文化の特徴とされている渦巻き文様の装飾が施された墓石や絢爛たる聖餐杯、笏杖、装身具などの金属加工品、さまざまな模様に移された陶磁器などから、彼らのすぐれた技術や文化水準の高さをうかがうことができる。また現存するアイランド語の最古の文献はおそらく八世紀から九世紀の間に教会のなかで書かれたものと推測され

ているが、これは転写されたラテン語の原本に修道士が説明のために付け加えた注釈であった。そしてこれらの文書はすべて頭文字に複雑かつ精巧な装飾が施されている。文化的にみて六世紀から九世紀にかけての三百年間はいわばアイルランドの黄金時代であった。

しかし八世紀が終わる頃からアイルランドは数波にわたって北欧から来たヴァイキングの侵攻を受け始める。九世紀になってから間断なく続いた襲来は十世紀になっても勢いが衰えず、各地の僧院や都市は彼らの掠奪の的となって荒らされる。侵入者と、彼らを撃退しようとした先住のケルト人の間で熾烈な戦闘が繰り返され、このため多くの建物などが破壊されたばかりか、貴重な文献や記録が焼かれたり持ち去られたりした。このヴァイキングの侵略と掠奪によって、僧院を中心にアイルランドが誇った学術文化は急速に衰退したのである。

ただ、ヴァイキングも破壊のためだけにやってきたのではなかった。彼らは偉大な船乗りであるのみならず、貿易業者としてもすぐれていた。中世アイルランドに商業活動をもたらし、ダブリン、コーク、リマリック、ウォーターフォードなどの都市を建設したのは彼らだった。アイルランドが政治的に統一されていなかったことが、外敵の侵入に対して弱かった原因の一つであるが、国土の北半分を統治していたオニール王は、ヴァイキングが彼の領土に定住することを許さなかった。十世紀の終わり頃になると、南西部のマンスターにもブライアンボルー王の下に新しい王朝が生まれ、北のオニール朝と対抗するようになる。ブライアンボルー王はしばしばデーン人といわれたヴァイキングを打ち破り、アイルランド全土の王と認められた。しかしヴァイキングはその後もアイルランドの諸王間の争いに干渉し、このために各地で戦乱が続いた。一〇一四年、ブライアンボルーは中世アイルランド史上最大の事件とされるクロンターフの戦いで遂に戦死したが、同時にヴァイキングにも壊滅的打撃を与え、以後ヴァイキングの勢力は著

しく弱まった。

このあと、十一世紀から十二世紀にかけてアイルランドは再生と復興の時代を迎え、再び芸術と文化が栄える。この時も文化面で指導的役割を果たしたのは教会だが、教会自身も宗教改革の努力を行い、従来以上にローマ正教会に接近するようになった。こうした宗教改革のリーダーとなったのが北ではアーマーの聖マラキ（一一四八年没）であり、南ではダブリンの聖ローレンス（一一八〇年没）であった。当時、アイルランドではブライアンボルーの後継者たらんとする諸侯の間で政治的覇権争いが続き、南のマンスター、北のアルスター、東のレンスター、西のコノートで、それぞれの王が勢力を伸張させた。歴史はアイルランドでもまた欧州大陸でみられたと同様、強力な中央集権的王政の確立に向かって動いていたのである。

しかし、十二世紀後半に入るとノルマン人の侵寇によって、この流れが中断される。レンスター王ダーモット・マクマロー（ゲール語ではディアルメト・マクムルカダ）はアイルランド全土の王になりたいという野心を達成するため、ノルマン人という外部の力を借りようとして、一一六七年から六九年にかけて南ウェールズにいたノルマン人をアイルランドに招き入れた。こうしてマクマローの死後、レンスターの王となったのはストロングボウ（強い弓）の異名で知られたノルマン人の武將リチャード・フィッツギルバート伯爵であった。さらに一一七一年にはノルマン人に君臨していたイギリス国王ヘンリー二世（彼も元来はノルマン人）がアイルランドに渡ってきて、アイルランド人、ノルマン人の双方から王として迎えられた。これがアイルランドとイングランドの関係が生じた直接の端緒となり、爾来アイルランドは七百年以上にわたってイギリスの政治的支配を受ける羽目になったのである。

ともあれノルマン人は瞬くうちにアイルランドの大部分をその支配下に収めた。しかし彼らもまた、この土地で生

活するうちに次第にアイルランド化し、やがて「本来のアイルランド人以上にアイルランド人らしく」なってしまった。ノルマン人は十三世紀を通じてイギリスの司法、立法、行政制度をアイルランドに持ち込み、法律や議会を作り上げた。アイルランドはいわばノルマン人の植民地となったわけだが、先住民であったケルト系アイルランド人の方も、この新しいノルマン人社会に少なからぬ影響を与えた。

ケルト系アイルランド人の間では自分たち自身の王朝を再興しようという試みもなされ、一三一五年、ケルト系のスコットランド王ロバートの弟、エドワード・ブルースがノルマン人の支配を覆そうとして反乱を企てたが、結局失敗に終わった。十二世紀以後、イギリスの統治下に加えられたアイルランドの東部地方はペイル（防護柵の意）と呼ばれたが、ノルマン人支配階級自体のアイルランド化や先住のケルト系勢力による侵食によって次第に縮小を余儀なくされ、十五世紀末にはダブリン周辺の一部地域を残すのみになった。

そこでヘンリー七世に始まるチューダー王朝はアイルランドにおけるイギリスの支配権を再び確立しようとして、一五四一年ヘンリー八世がみずからアイルランド王でもあることを宣言するとともに、多くのイギリス人植民者を送りこみ、現地化して英国王室への忠誠を忘れた旧アングロ・ノルマン系荘園領主やケルト系アイルランド人を武力によって容赦なく制圧しはじめた。エリザベス一世の軍隊がアイルランド人を打ち負かした一六〇一年のキンセールの戦いはイギリスによる新秩序の始まりであり、それまでのアイルランドの制度は廃止され、アイルランドは初めて強力なイギリス政府によって直接統治されることになった。

宗教心の薄い現代の日本人にとってはなかなか難しいことであるが、アイルランドを理解するためにはこの国の政治・社会に対し、カトリック教が如何に大きな影響力を持ってきたか、また現在も持ち続けているかを知る必要があ

る。アイルランドを征服したイギリス政府は十六世紀以降、アイルランドにも新教を押しつけようとしてあらゆる努力を払ったが、民衆の間に深く根を下ろしていたカトリック教のため、この試みはすべて失敗に終わった。それは新教がアイルランド人にイギリス政府の抑圧政策と密接に関連していると受け取られたことによるところが大きい。

支配階級はイギリスから来た新教徒であったが、彼らはカトリック教徒であるアイルランド人を自分たちよりも劣った人間として処遇したからである。ただ北東のアルスター地方だけは主として長老教会派のスコットランド人が多く入植したこともあって例外的に新教が広まった。すでに数世代前にアイルランドに渡来したイギリス人にはアイルランド化してカトリックになっていった者が多く、新たな植民者である新教徒とは肌合いも合わず、特権階級として君臨する新教徒に対し、次第に反発するようになっていった。一六四一年にアルスターのケルト系アイルランド人がイギリス政府に対し反乱を起こしたとき、これらのイギリス系アイルランド人もケルト系に同調した。その翌年、叛徒たちが集会を開いてキルケニー同盟と呼ばれたカトリック勢力の結集を謀ったが、たまたまイギリス本土で王と議会の間に争いが起こり、アイルランドもこれに巻き込まれて分裂してしまった。

この隙を突いてクロムウェルの議会軍がアイルランドに上陸、苛酷極まる弾圧政策でアイルランド人の反乱を完全に鎮圧した。クロムウェルの下で新教徒によるアイルランドの植民地化は一層推し進められた。大規模な土地の収奪が行なわれ、旧地主は自分の所有する土地を奪われて追放された。こうして新しく入植してきた新教徒の土地所有権が確保され、彼らの手に握られた政治権力は揺るぎないものとなった。

一六八五年に至り、カトリック教に帰依していた国王ジェームズ二世の即位によって、情勢に多少の変化が生じたが、彼の親カトリック政策はイギリス本国はもとより、スコットランドやアイルランドのアルスターでも不評を買い、

情勢は急速に不安定となった。これを好機と考えたオレンジ公ウィリアムはジェイムズ二世に挑戦、アルスターを除く全アイルランドがジェイムズを支持したものの、いくつかの戦闘でウィリアムの軍隊が優勢となり、一六九〇年のボイン川の戦いでジェイムズが敗れたあとは、ウィリアムの覇権が確立した。この結果、イギリス王ウィリアム三世はあらためてアイルランドの支配者となり、カトリック教徒は今度こそ完全に新教徒に従属する立場に追いやられてしまった。爾来二十世紀初頭のアイルランド独立に至るまでの間、カトリック教徒であるアイルランド人はイギリス人から蔑まれ、二等市民として差別されてきたのである。

こうした差別に対し、アイルランド人は何度もその不当性を訴え、反抗を試みた。このため、十八世紀を通じてアイルランド人は、彼らに理解があると考えられていたスコットランドのスコット王朝の復権を支持する危険分子とみなされていっそう弾圧を受けた。政府はとくにカトリック教徒だけを対象とした特別刑法を制定した。スコットランド人に多かった長老教会派も国教会派から宗教上の迫害を受けたが、カトリック教徒ほどではなかった。こうしてアイルランドで多数を占めていたカトリック教徒は被支配者として少数の新教徒の支配下に置かれ、政治的には無力であった。

一七七五年四月に始まったアメリカの独立戦争は、アイルランド人の心理に大きな影響を与えた。翌一七七六年にアメリカが独立宣言を発して、イギリスからの分離を達成するやアイルランドのカトリックのみならず新教徒もイギリス政府に対し、植民地での自治政府を認めるよう迫った。ついで一七八二年、それまで本国政府に従順であったアイルランド議会は独立した別の機関としての地位を要求、これを認められてイギリスと共通の国王を戴く別の王国となったが、行政政府は依然としてイギリス国王によって任命されていた。アイルランドの独立を主張した雄弁家として

知られるヘンリー・グラタンもこの時期にアイルランド議会で活躍した一人である。これらのアイルランド政治家の努力により、カトリック教徒のみを対象とした刑法も徐々に廃止され、貿易の自由化や改善のための措置がとられるようになった。

このあと自由と平等を求める一般民衆が国王に反抗して起こした一七八九年のフランス大革命は、思想的にアイルランドにも一大衝撃を与えた。一七九一年に創設された急進的な改革の実現をめざす結社「団結するアイルランド人同盟」には北部地区の長老派の人々も多数参加した。ウォルフ・トーン、ナッパー・タンデイ、エドワード・フィッツジェラルド卿らがその指導者であった。折りから英仏戦争が勃発、カトリック国フランスとアイルランドとの共同戦線結成を恐れたイギリス政府により、アイルランドでは反政府分子に対する苛酷な武力弾圧が行なわれた。一七九八年になると反英勢力を結集した「アイルランド同盟」がイギリスに対して公然と叛旗をひるがえし、イギリスからのアイルランドの分離独立を達成するために長老派を含めたプロテスタント、カトリック両派の大同団結の呼び掛けが行なわれた。この運動は彼らに共鳴するフランスの支援を受けたが、組織がまだ十分強固でなかったため、結局イギリス政府に鎮圧され、潰されてしまった。

しかし、この反乱の結果、イギリス政府もようやく事態の重大さを悟るようになり、イギリスはアイルランド人の不満を和らげるとともに政治的安定と防衛強化をねらって、アイルランド、イギリス両国の合邦と議会の一体化を決定、アイルランド議会は一八〇〇年に合法的に消滅した。以後、アイルランドは独自の議会を持たず、アイルランド選出の議員はロンドンのウェストミンスター議会での審議に参加するようになったが、彼らがイギリス議会で少数派であったことはいうまでもない。したがって、アイルランド議員の執拗な要求にもかかわらず、イギリス議会はア

イルランドのカトリック教徒に対する譲歩は殆ど行なわなかった。

現在ダブリンの都心部にオコンネル通りと呼ばれる大通りがあるが、この通りの名前はこの当時、活躍したアイルランド独立運動の指導者で、カトリック教徒の解放に尽力した建国の父、デーヴィッド・オコンネル（一七七五―一八四七）に因んだものである。一八二三年、自分もカトリックの弁護士であったオコンネルは「カトリック連盟」を設立、カトリック教徒のために完全な信教の自由を政府に保証させようとして大衆運動を組織した。その努力が実り、イギリス議会は一八二九年、カトリック解放令を制定、彼はそれまで行なわれていたカトリック教徒に対する数々の差別をほぼ全面的に撤廃させることに成功した。

つぎにオコンネルが目指したのは、一八〇〇年の英・アイ連合法の撤回とアイルランド議会の再開であった。彼は「撤回連盟」をつくり、カトリック解放のときと同様の戦術をとって、大衆行動の圧力で目的を達成しようとした。オコンネルの指導の下に、ときには数十万の大衆が動員された。しかし、徐々にアイルランドに対する支配を失うことを恐れたイギリス政府は容易に譲歩せず、一八四三年に計画されたクロンターフでの一大デモンストレーションは政府の認めるところとならず、中止のやむなきに追い込まれ、この失敗を契機にオコンネルの連合撤回運動は次第に下火となった。

一方、一八四〇年代には青年アイルランド運動が起こった。その指導者の一人トーマス・デーヴィスはアイルランドに在住する者は、出身や宗教的信条の如何を問わず老若男女すべてアイルランド国籍の保持者であるという考え方を提唱した。青年アイルランド党は一八四八年に反乱を起こし、これは失敗に終わったものの、彼らの思想は長く後の世代に受け継がれ、大きな影響を及ぼした。

十数年にわたって欧州大陸で戦われたナポレオン戦争の終結（一八一五年）はアイルランド経済に大変動を生ぜしめた。この戦争中、軍隊が必要とした食糧を供給するためアイルランドには広大な農耕地がつくられ、大量のジャガイモを生産、人々はジャガイモを主食とするようになっていた。アイルランドは農業国として安定的に発展し、人口も次第に増えて当時は八百万人を超えていたと推定されるが、その三分の二は農民として生活していた。ところが戦争が終わって最早軍隊への食糧供給が必要でなくなると、農耕地より牧草地への転用が盛んになり、人手もそれほど要らなくなったため、農村に多くの失業者があふれるという事態が起こった。そのようなときにジャガイモに病害が発生、不順な天候と相俟って一八四六年から四八年まで三年間連続の凶作が続いた。飢饉の惨状は目を覆うものがあつた。食糧不足から病気になったり、餓死する者は数十万人にも達し、生活に困窮してイギリスやアメリカに移民する者が続出したため、アイルランドの人口はわずか数年の間に半数近くにまで激減した。今日のアイルランドの人口は南北アイルランドを併せても総計五百万人強であるが、これは十九世紀半ばのこの飢饉が如何に凄まじいものであつたかを物語っている。

アイルランドの独立と土地改革を求める運動は十九世紀後半も続き、いくつかの注目すべき事件が起こっている。一八五八年には、「アイルランド共和兄弟団」（IRB）が結成された。この団体はアイルランド共和国の建設を目的として、アイルランドと米国で活動した秘密結社で、フェニアン団の通称で知られたが、フェニアンとは古代アイルランドで活躍したといわれる伝説的武士団のことであった。彼らは平和的な話合いでアイルランドの独立を達成しようとしても無駄であると信じて、武力闘争による目的達成をめざした戦闘的武装集団であった。ジェイムズ・スティーヴンスとジョン・オレアリを指導者とするフェニアン団は一八六七年に武装蜂起し、この時は間もなく鎮圧されたが、

組織はそのまま生き残り、のちにアイルランド共和軍（IRA）の中核となった。他方、合法的手段によってアイルランドの自治を求める運動も盛んであった。アイザック・バットの設立した「アイルランドに自治を」運動はその一つであった。彼らは一八七四年の総選挙で、アイルランド選出議席数の半分を獲得したが、彼らの要求はイギリスの議会制度の中でアイルランド独自の議会を持つことであった。この自治権獲得運動はチャールズ・スチュアート・パーネルが指導者となってから、一層強力に推進された。

この頃に各地で続発するようになった地主と小作人の紛争は、政治的、社会的に深刻な問題を投げ掛けていた。一八七九年、マイケル・ダヴィットは「国民土地連盟」を創設、小作人の基本的権利として、公正な小作料（fair rent）、作物の自由販売権（free sale）、農地土地使用権の確保（fixity of tenure）を目指す3F運動を推進した。パーネルはこの運動にも関係し、連盟の会長を務めた。フェニアン団もこれに協力したため、一八七九年から八二年にかけて一大国民運動が盛り上がり、この結果、イギリス政府は不在地主から土地を没収し、実際に耕作している者へ農地の所有権を譲渡させるといった一連の土地関連法を制定せざるを得ない状況に追い込まれた。

パーネルはさらにこの農民運動をベースに自治獲得へと運動を進めた。一八八五年の総選挙で自治党は東部アルスターを除き全国的に党勢を伸ばして躍進、時のイギリス首相グラッドストーンはこれに応えて二度にわたり、アイルランド自治法案を提案したが、議会で上院の反対にあい、惜しくも実現しなかった。パーネルは晩年、政敵から人妻との恋愛を問題にされ、その政治的理想の実現を見ずに一八九一年、失意のうちに他界し、以後アイルランド自治獲得運動は一時勢いが衰える。しかしパーネルの死後、数年を経ずしてアイルランドには再び力強いナショナルリズムの炎が燃え上がった。一八八四年創立のゲール体育協会はハーリングのようなアイルランド独特のスポーツ振興を通じて

民族意識の高揚に努め、九三年ダグラス・ハイド、E・マックニールらを中心に組織されたゲール語連盟はアイルランドの土着のケルト(ゲール)語やケルト文化の復興と普及に大きな役割を果たした。

政治的な動きとしては一九〇五年から八年にかけてアーサー・グリフィスがシン・フェイン(我ら自身)の名で知られる新党を樹立、アイルランド選出議員はウェストミンスターから引き上げてアイルランド独自の議会をつくるべしと主張した。シン・フェインはIRBと密接な連携をとり、必要とあれば武力を行使することも辞さないとの態度を鮮明にした。一九一二年、アイルランドに大幅な自治を認める法案がウェストミンスターで審議されていた。ジョン・レッドモンドが率いるアイルランド議会党は大成功を収めようとしていた。これに対して、プロテスタントが多数を占める北東部のアルスターでは逆にイギリスとの一体化の強化を求めるサー・エドワード・カーソンをリーダーとする自治反対運動が起こり、アルスター義勇兵組織が生まれた。

このため、カトリック教徒が大多数を占める地方ではこれに對抗して、一九一三年にダブリンで起こった労働争議を契機にアイルランド独立を目指す市民軍の大部隊が創設された。

一九一四年に第一次世界大戦が勃発するとイギリスは戦争遂行をすべてに優先させたことから、アイルランド自治問題は無期限の棚上げとなる。レッドモンドは苦況にあるイギリスを救うことが自治問題の実現を促進するとの考えから、義勇兵としてイギリス軍に参加するようアイルランド人に呼び掛けた。しかしこれに反対する者も多く、むしろ戦争でイギリスが繁忙を極めているときに宿願達成の好機だとして、ポーリック(英語読みではパトリック)・ピアス指揮下のアイルランド義勇兵とジェームズ・コノリーの率いるアイルランド市民軍が一九一六年の復活祭の日に、イギリスの支配に対する反乱を起こした。これが有名な一九一六年のイースター武装蜂起である。

この反乱は急遽イギリス本土から派遣された正規軍によって一週間で鎮圧され、反乱の首謀者たちは碌に取り調べも受けないまま、次々に処刑された。ところが反乱それ自体は失敗したわけだし、当初は一般民衆の反応も冷ややかであったのに、この首謀者たちが情け容赦なく処刑されたことによってアイルランド人の世論は急速に反英的となり、その二年後の総選挙では反乱を指導したシン・フェイン党が多くの特典票を集め、親英路線をとっていたアイルランド議会党を完全に圧倒した。

この勝利により、シン・フェインはエイモン・デヴァレラ党首の下、ダブリンにドールと称するアイルランドの単独議会を設立、これを力で抑えようとしたイギリスとの間で一九一九年から二一年まで英・アイ戦争が起こった。この戦争でアイルランド軍の司令官として指揮をとったのはマイケル・コリンズである。アイルランド軍はイギリス正規軍にゲリラ戦法で対抗、二年余りの戦闘の後、アメリカの仲介もあってようやく停戦が合意され、一九二一年十二月、英・アイ条約が調印された。これにより、アイルランドの三十二県のうち二十六県は英連邦の枠内で自治領の地位を獲得して自由国となり、のちのアイルランド共和国が誕生した。そして自治に反対していたアルスターの残り六県は皮肉にも一九二〇年、結局発効した自治法の適用地域となってベルファーストに独自の議会を与えられた上で、イギリスの一部として残留した。

このような状況の下で、一応イギリスとの連合から離脱した南二十六県で構成される自由国では一気に全土の完全独立を求める者と、とりあえずは英・アイ条約を尊重すべきだと考える者との間で対立が激しくなり、ついに内戦に発展した。前者はあくまでも国土の分割に反対するデヴァレラが率い、後者はコスグレーヴを首相とする新政府のもとでマイケル・コリンズが指揮をとった。

同胞相討つ不幸な内戦は一九二三年五月、ようやく停戦が成立して収束したが、この内戦により、カハル・ブル・アヤコリンズのようなアイルランド独立に功績のあった多くの指導者が死亡したのはアイルランドにとって大きな悲劇であったといわざるをえない。

アイルランド独立の直接のきっかけとなった一九一六年の復活祭蜂起は、歴史的に見て現在どのように位置付けられているのだろうか。この疑問に対して、一つの回答を与えるのは最近のアイルランド国民を対象とした世論調査で、その結果は次のとおりである。

(1) この蜂起を回顧するとき、誇らしく思うか。

思う…六五% 思わない…一四% わからない…二一%

(2) 武装蜂起は正しかったか、あくまで政治的手段によるべきではなかったか。

武装蜂起は正しい…五八% 政治的手段によるべき…二四% わからない…一八%

(3) この事件は今日のアイルランド政治にどんな影響を与えているか。

影響せず…三五% よい影響…二七% 悪い影響…一九% わからない…一九%

(4) 一九二二年の英・アイ条約はよかったか。

よかった…四五% よくなかった…二三% わからない…三二%

(5) 学校でのこの事件についての教え方はよいか。

よい…四五% 美化しすぎ…二五% よくない…一四% わからない…一六%

(6) IRAへの支持や同情を集めるのに役立っているか。

役立っていない…四三％ 役立っている…三七％ わからない…二〇％

(7) 当時の指導者たちが生存していたらIRAのテロ行動を認めると思うか。

思わない…六六％ 思う…一六％ わからない…一八％

(アイリッシュ・インデペンデンス紙が一九九二年に行なった調査による)

この調査結果ははっきりと一つの傾向を示している。すなわち、復活祭蜂起を公的に記念した行事を行なうことについては六五％の人が賛成しているが、半面、それとほぼ同数(六六％)の人が現在のIRAのテロ行為を是認していない、ということである。また大部分の人が一九一六年の武装蜂起がなかった場合でも、一九一二年のアルスター議定書後のユニオニスト(イギリスとの連合維持派)の態度からみて、北アイルランドの分離は不可避であったと考えていることが分かる。さらに武装蜂起は正しかったと答えた人が五八％にも上っているが、他の設問に対する答えをみると、回答者が現在と一九一六年当時の状況とをはっきりと区別して考えていることは明らかであろう。

アイルランドの自治は殆ど実現寸前であったのだから一九一六年の武装蜂起は必要であったとする見方と、蜂起があったために今日アイルランドは南北に分裂した状態に置かれているのだ、とする主張はいずれも十分な根拠を欠いている。しかし今日のアイルランドの世論は暴力反対が大勢であり、一九一八年の総選挙でシン・フェイン党が勝ったことで蜂起は初めて事後に承認されたことになったが、蜂起当時は必ずしも一般民衆の支持を得ていたとはいえないのではないか、との見方は興味深い。たदैえることは現在過激な暴力行為に走っているIRA(正確にはPIRA「暫定共和軍」)が一九一六年の蜂起軍の正統な後継者だとしても、現在の合法ナショナルリスト政党が自治支持派の後裔とすることも、ともに単純すぎて事実と反する、ということである。

今日のアイルランドの合法政党はすべて原則的には「平和的手段を通じて南北統一を実現すること」を究極の目標として掲げ、暴力による解決を否定しているが、それは北の同胞を力によって強制することは決して国益に資する所以ではないという考えに基づいているからである。しかし独立当時は状況が違っていた。自治支持派といえども原則論として暴力に反対していたわけではなく、ジョン・レッドモンドが主張したように、あくまでも目的達成のためにどちらがより有効かという手段の問題に過ぎなかった。もし武力抗争によって目的が達成されるのなら、それも十分是認され得るということはこの蜂起に批判的であったジョン・ディロンですら述べている。しかし彼は「アイルランドのような国の非武装の若者たちを、近代戦争のためにつくられた大量殺戮兵器の前に駆り立てるということは、犯罪か、全く話にならない愚行だとしかしいようがない」とも云っている。つまり、自治支持派が暴力に反対したのは、それが実際的かどうか、というプラグマティックな理由によるのであり、非合法なことは一切しないなどということではなかったのである。その意味では、彼らもあらゆる暴力に反対する良心的反戦主義者 (conscientious objector) とは決して同じではなかったというべきであろう。

(後記Ⅱ近く中央公論社から拙著『アイルランド史』が中公新書として刊行される予定であるので、さらに詳しいアイルランド史、とくに本稿では紙数の関係で言及できなかったアイルランドの近・現代史に関心のある方は同書を参照されたい。)